

## 基層信仰と密教の融合

——日本における不動明王の受容について——

川 野 憲 一

### はじめに 本稿の目的

我が国で信仰されている仏教の尊格のなかで、観音、地藏と並んで多くの人々に今なお、驚く信仰されているのが“不動さん”と呼ばれ、親しまれている不動明王ではないだろうか。全国各地の寺院、修行場はもちろん、街角の祠にも様々なかたちで祀られ、その前で祈りを捧げる人々の姿が絶えることはない。観音や地藏のように人々に対して優しい姿で接する仏と異なり、背に火炎を負い、剣と魔を縛る素を身に帯びる不動が何故、このように人々に信仰されるのだろうか。

本稿の目的は、“平安時代から現代まで、何故、不動明王がこれほどまで日本人に信仰されるにいたったのか”を、巨視的に明らかにすることにある。限られた紙数のなかで、厳密な考証を欠く点もあろうが、日本における不動明王受容を俯瞰的に論じた一試論としてご容赦いただき、最後までおつきあい願いたい。

## 一、「不動明王」の誕生と日本への請来

まず、日本に伝来する以前、不動明王という尊格がどのように誕生したかについて論じ、その図様と性質・属性を把握し、不動明王受容に関する考察の前提とする。

日本に最初に不動明王をもたらししたのは、弘法大師・空海である。そのイメージは、師・惠果が抱いていたそれであったことは、空海が唐から請来した彩色曼荼羅（惠果懸用曼荼羅の転写本）を空海の生前に書写させた神護寺藏『紫綾金銀泥両界曼荼羅』（通称『高雄曼荼羅』、図1）中の不動明王によって明らかである。真言密教では、この空海請来の不動明王の姿が後の世まで尊ばれた。では、この空海によって日本にもたらされた不動明王のイメージはどのようにして成立したのだろうか。

不動明王という尊格の原形は、インドで形成されたと考えられている。渡辺照宏氏<sup>1)</sup>によると、そのサンスクリット名は、アチャラ・ナータと言ひ、発音によって二種の意味がある。語尾の上がる発音は、山に鎮まっている自然の神、語尾の下がる発音は不動尊そのものを指すと言う。また、不動明王が坐す瑟瑟座と言われる岩座は、仏典に出てくる大雪山<sup>2)</sup>エヴェレストを指していると言う。即ち、インドにおける不動尊は、山の如く動かざる尊格というイメージから出発したと言える<sup>2)</sup>。

これが、「不動明王」という尊格として成立し、日本に請来される姿に整えられたのは、中国・唐代の不空、惠果の時代と考えられる。まず、テキスト上で「不動明王」という言葉の初出を探索してみる。すると、不動尊を説いた最古の經典である『不空罽索神変真言経』、『大日経』にこの名称は表れず、「不動尊」、「不動使者」と記される。「不動明王」という名称が初めて記されたテキストは、善無畏（六三七〜七三五）が『大日経』を翻訳する際にそれを補佐した

一行禪師（六八三〜七二七）筆録の『大日経』の注釈書『大日経疏』である。このことから、一行禪師周辺で「不動尊」が明王族の中心的存在・「不動明王」となっていたことが窺える。

このことは、不空（七〇五〜七七四）の曼荼羅イメージを伝える『胎藏旧図様』中<sup>(3)</sup>（図3）の不動と、善無畏の曼荼羅イメージを伝える『胎藏図像』<sup>(4)</sup>（図4）中のそれとの大きな隔たりからも推察される。『胎藏図像』の不動は、『胎藏旧図様』にみられ、日本にもたらされた初期の不動明王で一般的な、1. 弁髪を左方に垂下する、2. 齒をむきだしにした怒りの表情を持つ、3. ふくよかな体つきをしている、4. 炎をまとう、5. 上半身に条帛、下半身に裳を着す、などの特色はみられない。このことは、インドのマガダ国の王家の血を引くと言われる善無畏が持っていたインドの青年貴族のような不動のイメージが、不空の時代に炎を身にまとい、怒りを顕にした荒々しく、ふくよかな体つきをした明王族のリーダーとしての不動明王に変化したことを物語っている。では、不空は、どのようにして荒ぶる仏・不動明王のイメージを獲得したのであろうか。その詳細は別稿に譲りたいが、端的に言えば、これには、不空の一生が関係していると私は考えている。不空は、北インド出身のバラモン階級の父と西域人の母の間に生まれ、インド僧・金剛智に師事した。しかし、開元二十九年（七四一）に師が没したため、密教を究めんとインドに向かった。求法の旅は、インド南部からセイロン島（スリランカ）に及んだ。天宝五年（七四六）に長安に帰り、多くの密教經典、図像をもたらし、それらを漢訳し、時の王朝に尊崇された<sup>(5)</sup>。

先に『胎藏旧図様』に見た不動明王の荒々しいイメージは、不空がインド巡錫の旅の途次に接した、1. インドの精霊・ヤクシャ、2. 守門神（図2）、3. シヴァ神、4. 戦士などのイメージから生み出されたと私考する。即ちインドの土着的イメージ、荒々しい俗なる尊格のイメージがそこには息づいているのである。ここにおいて『胎藏図像』にみられた、貴族的なインド伝来の聖なる尊格とインド土着の俗なる尊格が融合し、日本に請来された不動明王のイメージが確立したと考えられる。そして、その姿は、大日如来の化身という最高の聖性を有しながら、慈悲のみでは導き難

い衆生を教化するために敢て怒れる姿をとるといふ、密教の根本經典『大日経』が説く不動明王の性格とも一致する。以上みたように、「不動明王」という尊格は、ヤマのカミという属性を持つアチャラ・ナータというインドのカミから出発し、中国・唐代に不空・惠果らによって大日如来の化身としての力を行使しうる明王族の王として、聖俗双方の性質・イメージを融合させることで生み出されたのである。

そのようにして成立した「不動明王」は、先述のように惠果の弟子・空海によって日本にもたらされた。この尊格を最初期に受容した平安時代の貴顕や僧侶たちは、1. これまで日本に存在しなかった、自分たちの願いをかなえる巨大な呪力をあたえる尊格、2. 密教の根本仏である大日如来の化身であり、悟りへの門につながる尊格としてこれを理解し、受容・信仰したと考えられる。東寺講堂の木造不動明王坐像などは、まさにこのような信仰の中で造像された仏と言えらるだろう。

しかし、注意しなければならないのは、不動明王を信仰したのは、上流階級や中央の学僧だけではないという事実だ。この尊格は、日本にもたらされた直後より、日本全国の様々な階層で、急速に受容・信仰されていった。そして、それに対する信仰は今日まで続いている。何故、このような現象が起きたのか。その理由を明らかにすることが、先にも述べたように本稿の目的である。そこで、次章からは、いくつかの大きな視点から、日本における不動明王受容の理由、様相を探っていくこととする。

## 二、不動明王受容の背景と実態

### — 造形的側面・観想、感得に適した人間及び密教以前の仏と近い姿

(一) 密教における視覚イメージの役割とその実態—観想、感得仏、図像仏

ここでは、不動明王の姿—造形的側面—から、日本における不動明王受容の背景を考えてみたい。そのための前提として、不動明王を説く密教における視覚イメージの役割・性質—観想、図像仏、感得仏などの概念—などについて若干説明しておく。

不動明王などを造像する仏教の一派・密教では、イメージはテキスト以上に重要とされ<sup>(6)</sup>、仏像・仏画などの視覚イメージは、単なる礼拝の対象以上の意味を持つ。即ちそれは、密教の最終目標である即身成仏をとげるための行法である身密・口密・意密を用いておこなう三密加持のうちの意密にあたる“観想”を行う際、不可欠なものと把握されているのだ。よって、それぞれの宗派、流派において伝えられた仏のかたち＝図像は殊更に重視され、忠実に受け継がれる。これは一重に悟りにつながる行法である観想を正しくおこなうためである。しかし、その一方で、法力に優れた高僧が修法・観想の最中、仏と一体となった状態で化学反応を起こしたように忽ちのうちに心の中に得るといふ仏のイメージもまた、観想を行う際に受け継がれる図像同様に価値あるものとして、密教においては尊重される。

この時に得られたイメージに基づいて制作された仏を“感得仏”(密教では意樂の仏とも呼ぶ)と呼び、感得の実相は、高僧伝、説話集、寺院縁起など仏教関係の史資料に散見される。この感得仏の最大の特徴は、経軌にしばられない初発性の高さ、逸脱した造形にこそある。通常とは大きく異なる造形が、常人には窺い知れない聖者の奇跡的体験<sup>あかし</sup>の証として尊ばれるべきであるという精神がそこにはある<sup>(7)</sup>。

これに対して、先に述べた、観想のために用いる、法流に受け継がれた、テクスト、イメージに忠実に制作された仏を画像に忠実という意味で“画像仏”と呼ぶ。空海が唐から請来したイメージを忠実に立体化した東寺講堂の木造不動明王坐像などは“典型的な画像仏”である。

但し、ここで注意しなければならないのは、一見、対立してみえるこの造像に関する二つの概念が実は表裏一体の関係にあるということだ。すなわち、長い間法流に伝えられ、重んじられてきた観想のための画像、その画像もまた、発生当初は高僧の感得仏であった事例が想定できるからだ。感得仏が長い年月の間、多くの人々に信仰され、様々な利益をもたらし重んじられるようになり、観想の対象となる視覚イメージⅡ画像として定着し、画像仏として流布していくという構図である。感得仏の代表例として人口に膾炙している滋賀県・園城寺蔵国宝・園城寺不動明王画像<sup>(8)</sup>（通称、黄不動）は、篤い信仰を集め、多数の模本・模像を生み出す。その代表と言える京都・曼殊院蔵国宝・絹本着色不動明王画像（図5）は、感得仏としての黄不動が持つ逸脱の造形を画像として受け継ぎ、極めて洗練された作風として昇華させている。感得仏が観想の対象である画像仏になっていく好例と言えよう<sup>(9)</sup>。

感得仏の系譜は、奈良時代から平安時代初期にかけて、日本古来の山岳信仰に道教や古密教が混淆した修行を山中や海辺を舞台に行い、その呪術的な力で庶民を救った聖が関わって造立された像に多くみられることが井上正氏によって指摘されている<sup>(10)</sup>。

中期密教と呼ばれる体系的な密教が伝来した後の平安時代の仏教美術を、密教美術としてそれ以前の奈良時代の仏教美術と区別して研究する傾向が仏教美術史にはある。確かに多くの入唐僧が命がけて持ち帰った新しい画像に基づく新たな画像仏が、本邦の仏教美術に豊かな華を咲かせたことは重要な歴史的事実である。しかし、また、そのことだけに眼を向けると物事の半分を見失うことになろう。何故なら、最澄にせよ、不動明王をもたらし空海にせよ、その生涯の前半は平安遷都以前の世界に属し、従来の大寺の仏教に飽き足らず、山林仏教、聖の修行の道に身を投じるところか

ら己の道を歩き始めからだ。若き日の彼らは、古密教の徒が参集する寺院・道場で多くの「感得仏」を目の当たりにしていたことだろう。彼らが、その出発の時点で役小角、行基などの系譜に連なる存在であったことは、民俗学、仏教史学、歴史学上の碩学がそろって指摘するところである<sup>11)</sup>。

このように考えてみると、中期密教の代表的仏である不動明王の受容の問題を取り扱う際、密教の行法に不可欠な「観想」のみならず、密教伝来以前から日本列島に住まう人々によつて尊重されてきた「感得」という概念もまた重要であると言えよう。

## (二) 観想、感得に適し、受け入れやすい人間及び密教以前の仏に近い姿

では、そのような観想、感得という概念を用い、密教伝来以前からの日本列島に生きた人々の信仰を踏まえ、不動明王の造形的側面から、それが受容された理由を考えると、不動明王の「二面二目二臂二足で人間に近い姿」が重要な要素となっていると言えよう。まとめると以下のようになる。1. 行者が一体となるべき存在として観想しやすい。(複数の頭、眼、手足などを持つ尊格が密教には多数存在するが、それらと自らが一体となるということはイメージしにくい)。2. 感得という行為がおこりやすい、おこないやすい。(上記と同じ理由で感得が起こりやすい)。3. 一般の人々にとつても異様さが少なく、受け入れやすく、感情移入しやすい。4. それ以前に親しまれていた薬師如来や観音菩薩と大きく異なるない姿・かたちで受容しやすい<sup>12)</sup>。

このように、不動明王の比較的人間に近い姿は、密教の行法の核である観想、密教以前から重んじられた神秘体験・感得にも適し、また、古来、日本に住した一般の人々にも受け入れやすかったと推察される。この不動明王受容に関する造形上の理由は、単純に思えるかもしれないが重要である。不動明王がその初期から、幅広い層に受け入れられ、佛像仏はもちろん、様々な感得仏が造像されたことは、残された多くの作品が物語っている。かつて筆者は、そのことに

ついて論じたが<sup>(13)</sup>、ここでそれを詳細に触れる紙数はない。そこで、平安時代以前から造像されたたまた感得仏の内でも特に重要な位置を占める「霊木化現仏」の系譜が不動に受け継がれている点のみを指摘しておくこととし、日本における不動受容の実態の一樣相を浮き彫りにしたい。

### (三) 感得仏の一典型—霊木化現仏としての不動明王—

霊木化現仏とは、仏教伝来以前より日本列島に住した人々が育んできた樹木に対する信仰を背景として成立した仏の呼称である。古来、日本列島に住した人々は、人間より遙かに長い年月を生きる樹木には、神秘的な力が宿り、カミが拠りつくと考え、聖なるものとして信仰し、その前で祭祀をおこなってきた。そして、日本に仏教が伝来した際、ホトケを異国のカミとして捉え、自らが培ってきた樹木信仰の中で、カミ同様聖なる存在であるホトケもまた、樹木に宿ると考えるようになった。

井上正氏は、そのような信仰を背景に、ある日、僧侶（井上氏によれば行基）が、このような聖なる樹木・御神木・御霊木からホトケやカミが出現する瞬間を見（感得し）、霊木からホトケ（カミ）が出現しつつある奇跡の過程を表した仏像（神像）がつくられるようになったと主張された<sup>(14)</sup>。井上氏は、このようにして造られた仏（神）を「霊木化現仏（神）」と名付け、永年にわたる地道な調査の結果、それらが広く全国に造立されていることを示した。そして、その特徴として、1. 素木の一木造、木の節をも尊重する造形。立木仏など。2. 荒彫の段階で刀を止める（未完成の状態）造形。3. ノミ痕を水平方向に揃えて目立たせる造形（いわゆる「鈍彫」、図6）。4. 左右に大きく歪んだ造形↓霊木のかたちを尊重した造形（図7）。5. 正面を通常または、それに近く仕上げ、背面を荒彫または略体彫とする造形（図8）。6. 眼・耳・螺髪・宝髻・頭上面などを化現相（出現の過程にある状態）とする造形（図9）。などを挙げた。



今、ここで挙げたような霊木化現仏としての特徴を持つ不動明王として、ノミ痕を残し、全体的に略体彫とする福井県越前町・大谷寺蔵木造不動明王立像(図10)、体が右に大きく歪む造形を持つ、天台きつての不動の験者・相応和尚感得と伝える滋賀県近江八幡市・伊崎寺蔵木造不動明王坐像(図11)、眼を彫らず、後頭部の一部に髪筋を表さない比叡山延暦寺一山蔵木造不動明王坐像(図12)などを典型的な例として挙げることができる。しかし、今、ここに示した例はほんのわずかであり、この他にも密教伝来以前から続く「霊木化現仏」の思想を背景として生み出された不動明王は数多く存在する<sup>15)</sup>。このことは、不動明王というインドで生まれた尊格が、日本人にとって真に聖なる存在として、受容されたことを物語る。

以上、ここまで不動明王の造形に注目し、それが日本列島に住した人々に受容された理由及び様相をみてきた。その結果、不動明王の人間に近い姿が、一般の人々に受け入れやすく、観想という密教行法の核に適しているのみならず、感得という密教以前から日本人が重視した神秘体験をも引き起こしやすいという結論を得た。そして、その感得仏の中でも重要な位置を占める霊木化現仏の思想を背景として造像された不動明王が多数存在していることを確認し、深い精神の部分で不動明王が日本人に受容されてきた実態をみた。それでは、次に不動明王という尊格の持つ性質・属性に注目し、引き続き日本における不動明王信仰隆盛の理由を探っていくこととする。

### 三、不動明王受容の背景と実態―精神的側面

人間は、自分たちが持っている思考の枠組みで新しい知識や現象を理解する。驚くべきことだが、不動明王ほど、日本人が培ってきた精神構造に合致した仏は存在しなかったと言える。以下、不動明王の持つ性質・属性と日本人の基層信仰の一致をみていくことにしよう。

(一) ヤマのカミという属性を持つ点

第一章でみたように、不動は当初、インドのヤマのカミとして出発した。そして、日本人も古来、ヤマを人智を超えたカミ、聖なる存在が息づく特別な場として考え、尊崇してきた。具体的には、1. 刻々と表情を変化させる山を、獣そのものとして畏れ、敬った<sup>16)</sup>。2. 円錐状の山を古来の神・蛇がとぐるを巻く姿と考えた。3. カミが降り立つ場所、天上と地上をつなぐ場所と考えられた。4. 太陽が生まれ、太陽が死ぬ場所と考えた。などが挙げられる。インドのヤマのカミ・不動明王は、ヤマを数万年前から神聖視し、崇拜してきた日本人にとって自然に受け入れることのできる存在だった。

(二) イワと密接な関係がある点

不動は、密教の根本経典・『大日経』に「大盤石に坐す」と記され、実際、不動明王と岩とは切っても切り離せない関係にある。第二章で述べた樹木同様、古来、岩をカミが依りつくものとして神聖視し、崇拜してきた日本人にとって受け入れられやすい性質であった。具体的には、1. 縄文時代より続く磐座での祭祀。2. 神道での影向の思想。(上賀茂神社での影向石。熊野のゴトビキ岩など)。3. 朝鮮半島で生まれた岩から神仏が姿を表すとされる霊石化現思想の影響。などが挙げられる。

これらの思想、特に巨石にカミが依りつき、そこから出現するという信仰に根ざした感得仏(神)を霊木化現仏(神)の類似概念として霊石化現仏(神)と呼ぶ。これらは、先にみたように日本人が古来、聖なる場として信仰したヤマの岩肌彫られるいわゆる磨崖仏に典型的にみられる。磨崖仏と言えば、山中で修行する行者のために制作されたと考えるのが一般的であり、それも一面において正しい。しかし、より根源的にその造像目的を考えると、それは、聖なるヤマ、その中でも特に山の力が集中し放射されると考えられた岩肌から、ヤマ・イワに依りついた仏(神)が出現

している瞬間を表すために造形化したものという結論にいたる。そして、その磨崖仏に最も相応しい仏が、ヤマの神であり、イワと密接な関係にある不動明王という尊格なのである。全国に造立された磨崖仏の約八割は不動明王であるが、これは、磨崖仏を、古よりの日本列島に根付いたヤマ・イワへの信仰を背景とした靈石化現仏として捉えることにより、合理的に理解できる。その中でも特に強い力を感じさせる磨崖仏として、立山信仰の聖地、富山県日石寺の不動明王磨崖仏(図13)、九州における山岳修験の聖地、国東半島の熊野不動明王磨崖仏(図14)を挙げておくこととする。また、木彫像ではあるが、山の岩肌の前に安置され、石彫像を思わせる大分県竜岩寺の不動明王坐像(図15)もこの系譜上に位置づけうると私は考えている。

(二) 蛇と密接な関連がある点

不動明王が持つ剣には、国宝・青蓮院藏絹本著色不動明王二童子画像(通称、青不動)や国宝・絹本著色明王院藏不動明王画像(図16、通称、赤不動)のように龍が巻きつく場合がある<sup>10)</sup>この龍は、俱利伽羅大龍と言われ、不動明王の化身と説かれる。古来、日本では、龍とは蛇が成長した姿、もしくはその巨大なものと捉えられていた。そして、これは世界の古代社会に共通することであるが、日本人も古来、蛇を信仰してきた。その信仰の実態を次に挙げると、1. 縄文土器などに蛇がデザインされていることで知られる蛇信仰。2. 出雲大社、諏訪大社、三輪大社など日本において有数の歴史を持つ古社に蛇信仰が息づいている点。3. 稲作を生業とした農耕民にとって水の神としての蛇信仰。4. 仏教伝来後、蛇↓龍への読み替えが各地でおこる(寺院開基の物語。例として白山の開基伝承など各地にみられる。龍が登場する寺院の開基伝承が存在する地域には、かつて蛇信仰が息づいたと考えられる。)事実。5. 各地の峠に残る俱利伽羅峠などの地名から窺える蛇信仰に替わる不動信仰の定着。などとなる。

このように、蛇と密接な関係を持つ不動明王は、この点でも古よりの日本人の精神構造に合致していたと言える。

## (四) 火炎と密接な関連のある点

不動明王と言えば、燃え盛る火炎を背に負う姿が真つ先にイメージされる。不動明王と火炎の関係性は強い。これも世界の古代社会に共通する特色であるが、古来、日本人も火に対する信仰心を持ち続けた。具体的には、1. 原始祭祀との関連↓文明の象徴としての各地の火まつり⇨出雲大社の祭・火継式など。2. 穢れを焼く火の思想との関連。などが挙げられる。

いずれも、日本の基層信仰である。燃え盛る火炎を背にし、火を御す存在としての不動明王は、日本人の精神構造にここでも合致しているのである。ここで詳細には論じられないが、民俗学との関連で、古来、製鉄業を営んだ人々の不動明王信仰にも興味を引かれる。谷川健一氏によれば、古来、製鉄業を営んだ人々は、製鉄の最中、火炎を見つめつけ、その色によって作業工程を管理していたため、徐々に視力を奪われていったと言う<sup>88</sup>。そして、片目の視力が衰えると、もう一方の目で炎を見つめたと言う。谷川氏は、一つ目小僧や全国に伝わる隻眼の神の足跡をたどり、それらが、製鉄を生業とした一族の伝承を伝えるものであるという説得力のある説を提示した。私がここで興味を持つのは、それら製鉄を生業とした人々が不動明王を篤く信仰してきたことである。これは、もちろん、火を制し、剣を持つという不動明王の性質が鍛冶をおこなう人々にとって信仰するに相応しい存在であったためであると一般的には考えられる。しかし、もう一つ重要な理由があると私は確信している。それは、先程、述べた鍛冶氏が隻眼の存在として語られるという点である。不動明王も「十九観様」不動が広まった後は、そのほとんどの作例が、左目を閉じる形で造られる。製鉄に携わり、視力を失った人々にとって、この不動の姿はまさに自分達が信仰するに相応しい仏と映ったのではないだろうか。詳細は別稿にて論じたいが、ここにも日本における不動受容の一断面を見る思いがするのである。

(五) 怒れる神と関連のある点―怒れる仏・明王族のリーダーとしての不動明王―

不動明王と言えば、魔を降伏する明王族のリーダーとして、絶大なる力を持つ怒れる仏である。その面相は、眉が張り上がり、眼をかつと見開き、歯や牙をむき出しにした姿をとる。このイメージは、日本人が持っていた荒ぶるカミのそれと一致する。具体的には、1. 古来、日本のカミは、敬えば恵みをもたらし、無礼をはたらけば、不幸をもたらす優しさと恐ろしさを兼ね備えた存在であった。つまり、怒れるカミという概念が古来、存在した。2. スサノオノミコトなどはその代表例。また、各地に残る男神の神像には、厳しい表情をしているものが多い。

この怒れるカミ、荒ぶるカミという概念が、怒れる仏・不動明王のイメージと結びつく。この点でも不動明王は、日本人の基層信仰と密接に結びついているのである。

(六) 言霊思想と関連のある点―力ある言葉「明」の王としての存在―

不動明王は、古代インドで信じられていた言葉の神秘的な力・「明」を尊像化した「明王族」のリーダーである。絶大な言葉の力を統御する王としての性質を不動明王は持っている。この性質は、日本古来の言霊思想と合致する。日本人も古来、言葉には神秘的な力が宿ると信じており、良いことを言えば良いことが起こり、悪いことを言えば悪いことが起こると考えていた。結婚式などで唱えられる祝詞にその名残をみることができ、言葉に現実を動かす絶対的な力を認め、それを尊重する。この点でも不動明王は、日本の基層信仰と見事なほど合致する仏なのである。

以上、不動明王の持つ性質・属性に注目し、日本人の基層信仰との一致をみてきた。その結果、不動明王が有する六つの属性が日本人の精神の奥深くに刻み込まれた基層信仰と見事に一致することが確認できた。造形的側面のみならず、その性質・属性においても不動明王は日本人に受容されるべき必須条件を十全に備えていることは最早明らかだろう。

おわりに―基層文化と密教の融合

“何故、不動明王がこれほどまで日本人に信仰されるにいたったのか。”冒頭に掲げたこの問いを明らかにするために造形的側面、精神的側面双方から、不動明王と古来、日本列島に住した人々の関係性をみてきた。その結果、日本人の心の奥深くに育まれてきた核の部分と不動明王の姿、性質が驚くほど合致していることを確認することができた。恐ろしいほどの容貌を持ちながら、篤い信仰を集め続けている不動明王。インド、中国ではそれほど広まらず、日本において永く幅広い層に信仰され続けた理由は、日本人の奥深くに根付いた基層にその存在が響いたからに他ならない。今後この神秘的な尊格の多様な魅力について引き続き研究を進めて行きたい。

註

- (1) 渡辺照宏『不動明王』（朝日選書35）朝日新聞社出版局 一九七五
- (2) このようなインドにおける不動の原形イメージを求める時、注目される視覚イメージとして、 Gupta 期に制作されたアジャントア第十七窟の主廊後壁を挙げておく（図2）。それは、入口の向かって左下に描かれた山岳を背負う守門神形の尊像である。この尊像は、青黒色で丸い髻を結び、条帛とドーティーのみを着し、供物を捧げる姿で描かれる。中でも背中に負う抽象化された山岳表現の形態は秀逸で、不思議な魅力に満ちている。おそらくこの人物の持つパワーを視覚化したものだろう。まさに、この尊格は、アチャラ・ナータ（山岳の王）のインドにおけるイメージを示しており、不動明王の遠い原形を想起させるものである。
- (3) 円珍が在唐中の大中八年（八五四）、開元寺で書写した、『大正新修大藏經』圖像篇（以下大図とする）二巻所収。
- (4) 開元十二年（七二四）、善無畏が、『大日経』を漢訳する際、自らが持っていた曼荼羅の尊格のイメージを図示したのと言われる。円珍が、大中九年（八五五）、西安で書写した。大図二巻所収。

- (5) 不空については、佐和隆研編『密教辞典』法蔵館 一九七五などを参照されたい。  
このことを端的に示した言葉として、空海が師・惠果の言葉として記した「密蔵の教えは深玄にして翰墨に載せ難し。凶画を仮て悟らざるに開示す。」がある。(空海著『御請目録』所載。原文漢文。書き下しは筆者。)
- (7) 人口に膾炙したものとしては、役小角感得と言われる蔵王権現、智証大師円珍感得の黄不動などが挙げられよう。いずれも部分的に一致する先行のイメージソースこそ指摘できるものの、確実な経軌上の典拠は存在しない。
- (8) 秘仏であるため、凶版については、『秘仏金色不動明王画像』園城寺 朝日新聞社会 二〇〇一を参照。  
凶像、観想、感得などについて有効な示唆を与えてくれる論考に次のものがある。
- (9) ①井上正「日本彫刻史の編年と感得像」〔学叢〕二〇 京都国立博物館所収) 一九九八  
②泉武夫「画像と行法をめぐる形と意味」〔講座日本美術史〕三 東京大学出版会所収) 二〇〇五  
③森雅秀「感得像と聖なるものに関する考察」〔仏教美術と歴史文化・真鍋俊照博士還暦記念論集〕法蔵館所収) 二〇〇五  
④森雅秀「仏のイメージを読む マンダラと浄土の仏たち」法蔵館 二〇〇六  
⑤拙稿「凶像と感得の間で―同聚院蔵不動明王坐像の位相」〔安藤佳香編『不動明王像造立一千年記念誌』所収) 東福寺塔頭同聚院 二〇〇六
- ⑥拙稿「感得された“力”―正智院蔵木造不動明王坐像の造形」〔美学芸術学』第二十九号) 二〇〇九
- ⑦井上正「続古佛」法蔵館 二〇一一
- (10) その特徴としては、1. 自然主義に基づいたプロポーションの破綻、2. 畏怖の相と量感の強調、3. 左右のゆがみ、4. 仏、カミが霊木から出現する過程を表すサインとしての未完成表現など、いずれも通常の円満具足な仏の相好とはかけはなれた、個性あふれる造形が挙げられる。これらの像に共通する調和よりも逸脱を志向する造形は、いずれも“感得”という聖者の宗教行為を想定しなければ、その造形の真の意味は掴めない。写実的か否かとか、人体としてのプロポーションが整っているかどうかとかいう物差しだけを当てはめることは、これらの像の聖なる造形を稚拙な造形と評価し、貶めることになりかねない。
- 井上正「古佛―彫像のイコノロジー」法蔵館 一九八六
- 同「神仏習合の精神と造形」〔図説日本の仏教6 神仏集合と修験』新潮社 一九八九所収)
- 同「岩波日本美術の流れ2 7―9世紀の美術」岩波書店 一九九一他、註(9)に挙げた井上氏の一連の論考を参照されたい。
- 次に挙げる文献などを参照されたい。

- ① 渡辺照宏・宮坂宥勝『沙門空海』筑摩書房 一九六七
- ② 上山春平『空海』（朝日評伝選）朝日新聞社 一九八一
- ③ 松長有慶『空海―無限を生きる』（高僧伝四）集英社 一九八五
- ④ 宮崎忍性『私度僧空海』河出書房新社 一九九一
- ⑤ 五来重『空海の足跡』角川書店 一九九四
- ⑥ 松岡正剛『新版 空海の夢』春秋社 二〇〇五
- (12) 密教伝来以前、即ち不動明王伝来以前、魔を降ろす尊格、巨大な呪術力を持つ存在として尊崇された尊格が薬師如来、観音菩薩であった。私は、これを荒ぶるカミのイメージが仏に反映した結果であると捉え、ホトケのカミ化と呼称している。その代表例は、神護寺本尊薬師如来立像や勝尾寺本尊薬師三尊像、観菩提寺本尊観音菩薩像などである。これについては、註(9)、註(10)で挙げた井上論文及び安藤佳香「勝尾寺薬師三尊像考」(『佛教芸術』一六三号 一九八五)を参照されたい。
- (13) 註(9)参考文献⑤、⑥を参照されたい。
- (14) 井上正氏の霊木化現仏に関する研究は、註(9)、(10)で挙げた文献を参照されたい。
- (15) その他の多くの作例については、註(9)参考文献の拙稿を参照されたい。
- (16) 町田宗鳳『山の霊力』講談社 二〇〇三
- (17) これは、平安時代中期以降、広まった「不動十九観」という観想法の第十八観想に不動明王が俱利伽大龍に変化し、剣にまきつくという記述があることから、一般的に広まったと考えられる。
- (18) 谷川健一『青銅の神の足跡』集英社 一九七九を参照されたい。

謝辞

私が、本稿でもテーマとしてとりあげた不動明王を卒業論文のテーマとし、現在も尽きせぬ魅力を感じて研究を続けることができてるのは、太田孝彦先生のあたたかいご指導があったお陰である。何も分からない学部の時より今日に至るまで、本当に様々なものを与えていただいた。ここに深く謝意を表します。





図6 十一面観音 城崎・温泉寺



図5 黄不動 曼殊院



図1 不動明王『高雄曼荼羅』



図2 守門神？ アジャンター第17窟



図8 薬師如来  
背面 日向薬師



図7 十一面観音  
下半身 克軍寺



図3 不動尊『胎藏旧図様』



図9 阿弥陀如来 面部 太平寺



図4 不動尊『胎藏図像』



図 14 不動明王磨崖仏 熊野



図 12 不動明王  
頭部 延暦寺



図 10 不動明王  
上半身 大谷寺



図 15 不動明王 竜岩寺



図 16 赤不動 明王院



図 13 不動明王磨崖仏  
日石寺



図 11 不動明王 伊崎寺